



上智大学創立 100 周年
上智短期大学創立 40 周年
上智社会福祉専門学校 50 周年



先哲祭

No. 17

1. 先哲祭とは

カトリック教会では、11月2日は「死者の日」と呼ばれ、欧米では街中に静かな教会の鐘の音が響き、人びとは亡くなった人のために祈り、静かな一日を過ごす習慣がある。この慣習は、ヨーロッパでは11世紀の始め頃から行われ、カトリックの典礼暦に11月2日を、死者を記念して祈る日と定められた。

こうした死者のための祈りは、どこの国でも、またほとんどすべての宗教に見られることであり、日本カトリック司教協議会でも『祖先と死者についてのカトリック信者の手引き』で、次のように述べている。

「キリスト教における死者の記念と尊厳は、死者のために祈ることが中心になっています。祈りは、自分の身内、親類、その他関係のあった人たちのための捧げるのは当然ですが、この世で私たちと縁のなかったすべての死者のために祈ることも大切です。(中略) 教会はこのような精神のもとに、それぞれの国の習慣を取り入れ、死者の記念を行ってきました。(中略) したがって、日本でも同じ精神に基づいて日本の伝統を適切に取り入れて『死者の記念』を実践したいものです。」

こうした伝統を踏まえて上智大学でも、その年に亡くなった教職員・学生を偲んで「先哲祭」が行われている。「先哲祭」とは、今日の上智大学の発展の礎となられた幾多の先人の功績をたたえ、遺徳を偲ぶために行われる行事である。聖フランシスコ・ザビエルの「ミヤコに大学を」との宿願の精神にまでさかのぼり、その願いを果たしたヘルマン・ホフマン初代学長を初めてとして、上智大学は多くの「先哲」の礎のうえに築かれてきた。このことを思い起こして祈る行事である。



聖イグナチオ教会(旧)での先哲祭(1969年)

2. 先哲祭の始まり

1937年1月発行の「ソフィア會報」に、「先哲祭」がいつはじまったかの具体的な記述が掲載されている。「會報」とは、卒業生の親睦団体が会員相互の連絡や母校の様子を伝えていたものである。それによると、1935年6月23日は、上智大学創立者の一人であるヨゼフ・ダールマン神父の帰天5周年に当たるので、この日に教職員、文学部在学学生、卒業生が、府中のカトリック墓地に詣で、同時にマーク・マックニール、水野繁太郎など、亡くなった教員の追悼も行った。そして、これを機に上智大学功労者を追懐する式の案が浮上し、同年11月2日に1号館講堂で教職員、学生が一堂に会して「先哲祭」を行った、とある。これが「先哲祭」の発端である。



上智大学創設に大きな役割を果たしたヨゼフ・ダールマンSJは、1930年6月23日に帰天(写真は神父の葬儀)、府中のカトリック墓地に埋葬された最初のSJ

しかし太平洋戦争によって中断を余儀なくされ、復活したのが戦後の1950年9月である。学生活動の援助を目的とした上智大学学生活動委員会が発足し、その活動の一環として11月の大学祭（後にソフィア祭と名称変更）のときに「先哲祭」が行われた。この行事は上智大学の特色を鮮明にしようとする意図もこめられていた。それ以降、上智大学新聞によると、中断された年や日程が11月3日に変更になった年もあったが、大学の重要な記念行事として毎年11月2日に定着した。学生も「カトリック学生の会」を中心に、ソフィア祭の時期に行われたため「ソフィア祭実行委員会」、また記念ミサに関連する「上智聖歌隊」「混声合唱アマデウスコール」などが協力している。

3. 先哲祭ミサと場所

先哲祭のミサでは、キリストの死と復活に倣い、死者を永遠の命に導く祈りが捧げられる。2011年の先哲祭で説教した増田祐志神父は、その年に亡くなった上智関係者だけでなく、東日本大震災で亡くなった被災者のためにも祈った。

先哲祭の行われた場所は、1949年に建てられた木造建築の聖イグナチオ教会（旧教会）、学内にあるクルトウルハイム、10号館講堂などで行われ、1999年からは装いを新たにした聖イグナチオ教会の「マリア聖堂」で行われている。そして最後に必ずホフマン学長の遺影に花束が捧げられる。かつては2号館前にあるホフマン学長の胸像に献花する式典が行われたこともあった。



ホフマン初代学長の胸像に献花が行われた時もあった(1969年)



クルトウルハイムで行われた先哲祭(1970年頃)

2010年に聖イグナチオ教会のマリア中聖堂で行われた先哲祭(ホフマン学長の遺影とともに2010年に物故した教職員・学生の写真が飾られ、厳粛なミサがおこなわれる)

